

「きょうも、学校でいろんなおべんきょうをして、いろんなどうぶつさんとあそんで、とってもたのしかったです……っと。できた！」

わたしは、先生たちからもらったえんぴつをにぎって、きょうの1日をふりかえって日記をかいた。

「書けたか。」

「かけました！」

「そろそろ就寝時間だ。机の上を片付けて早く寝ろ。」

へやに入ってきた先生がわたしにはなしかけた。先生は、わたしがかいた日記をもって、へやを出ていった。

わたしは学校でくらししてる。おきたら、先生たちがもってきたごはんをたべて、はみがきしたらおべんきょう

うして、おひるごはんたべて、うんどうして、よるになったら、おふろに入って、1日の日記をかく。

まい日たのしくて、あしたがるのがたのしみでしょうがない。

――次の日の朝。

歯みがきをして、お勉強する部屋に行って、イスにすわった。いつもはイスがわたしの分一つしかないけど、今日は二つならんてた。

「新しい仲間を紹介する。入ってこい。」

目の前に立った先生が声をかけると、ドアがゆっくりと開いた。部屋に入ってきたのは、かみのけを一つに結んだ女の子。わたしの顔をチラッと見たと思ったけど、スッと目をそらされた。よく見ると、くちびるがふるえてる。

「自己紹介をしる、ナンバー72。」

「……72です。よろしく。」

ちょっと声が小さい。キンチョーしてるのかな。

「わたしは65。よろしくね、72！」

あんまり目を合わせてくれないのは少しさみしいけど、初めての仲間にすごくワクワクする。

72は、わたしのとなりのイスに静かにすわった。

たしか、対等な立場な人のことって、トモダチってよぶんだよね。これがトモダチってやつか！

学校の中で今まで何回か、わたしと同じくらいの年の子とすれちがったことがあるけど、先生に毎回「見るな」って言われる。だから、はじめて話せる子ができて、すごくうれしいなあ。

そんなこと考えてたら、あっというまにお勉強の時間が終わった。お勉強が終わったら先生が、お皿の上にパンが何コか乗ったものを部屋に置いていった。

わたしは一つのパンを手を取った。72の近くまでイスを近付けて、話しかけに行った。

「学校、まだ分かんないこと多いでしょ。わたしがなんでも教えてあげるから、色々聞いてね！」

72はパンにも手をつけず、わたしのことを無言で見てる。

「パン、おいしいよ？」

わたしがそう言うと、72はパンを一コだけ取って、小さくかじった。

「名前は？」

パンを食べてると、72が聞いてきた。72から話かけてくることは初めてで、ちょっとうれしかった。

「わたしはね、65だよ。」

「でも、それは……。」

72が何かを言いかけたけど、ちょっと考えてやめた。

「じゃあ、ユリって呼んで良い？」

「ユリ？」

ユリ……。ユリかあ。

「すっごくかわいい！　じゃあ、72のことはなんてよんだら良いかなあ。」

72がつけてくれたんだから、わたしも72の名前をつけなきゃだよね。でも、いっぱい考えても、いい名前は出てこない。

「う〜ん……。」

「私の名前はケイ。ケイって呼んで。」

「ケイか。うん、いい名前！」

65と……じゃなかった。ケイとちょっと仲良くなれた気がして、ちょっとうれしい。

「それとユリ。」

「どうしたの？」

「……パン、にぎりつぶしてるよ。」

そう言われてパンを見てみたら、わたしの手の中でバラバラになっちゃってた。

「え？　わわっ！　ホントだ！　せっかくのパンが……。」

「まだパンはあるんだから。そっち食べようよ。」

「……うんっ、そうだね！」

そんなことを話しながらパンを食べて終わったら、運動する部屋に行った。その部屋では、いろんな動物さんがいて、遊びながら運動する。先生たちからは、この動物さんたちが動かなくなるまで遊んでって言われている。

今日、部屋にいたのは、わたしの何倍も大きな動物さん。わたしはワクワクしながら横を見てみると、ケイは口を手でふさいで、目を大きく開いて、目の前の動物さんを見てる。ケイがちょっとずつ後ろに下がる。

「ケイ、だいじょうぶ？」

「え、う、うん……。」

わたしがケイの手をにぎってあげたけど、ケイがわたしから目をそらした。暗い顔してる。

ケイはあんまり元気が無いみたい。ケイの元気が出るまで、わたしが動物さんと遊ぶことにした。最近、動物さんと遊んでると、ちょっとポンってさわっただけで転がってたおれちゃうことがある。でも先生から、力いっぱい全力で遊んでって言われているから、これで良いんだと思う。

動物さんがみんなたおれちゃって、何もすることがなくなったからケイのそばに近づいたら、ケイが泣きそうな顔でわたしを見てる。

「ケイ、ホントにだいじょうぶ？　無理しちゃだめだよ。」

「……うん。」

運動が終わってから、わたしが毎日ねてる部屋に、ケイといっしょに帰った。二人で話していると、部屋のドアが開いて、先生が入ってきた。

「この薬を飲め。」

わたしは、先生にわたされたいつものお薬を飲んで、日記を書く用意を始めた。

「どうした、72。早く飲むんだ。」

日記を書こうとしたら、後ろで先生がちょっとイライラしてる声が聞こえた。先生とケイの様子を見に行ってみる。

ケイは、先生からわたされたお薬を持ったままで体が固まってる。手がプルプルふるえてて、顔も青ざめる気がする。お薬、苦手なのかな。

「それちょうだい！」

わたしはケイの手からお薬をとって、口に放りこんだ。先生は急いでわたしの口を無理矢理こじ開けて、手

をつっこんでお薬を取り出そうとした。でも、わたしがもう飲んじゃったから、お薬を取り出すことはできない。

「くそっ、勝手なことしやがって……。まあ良いか。明日は自分で飲めよ、72。」

そう言って、先生は部屋を出て行った。

「大じょう夫!？」

ケイはわたしにかけよって、顔をのぞきこんできた。

「うん。何の薬なのかはわたしも分かんないけど、1コくらい多く飲んでもだいじょうぶだと思う。」

「体調とか、変わったところは!？」

「このお薬を飲んだら、体がポカポカして、頭がぐるぐるしちゃうの。でも、本当にだいじょうぶだよ。」

「.....そっか」

わたしがそう言ったら、ケイはもっと暗い顔になっちゃった。ほんとにだいじょうぶなのに。

わたしたちは日記を書いて、部屋にもどってきた先生にわたして、すぐにおふとんに入った。

――それから、私達は毎日一緒に過ごした。勉強も、運動も、ご飯も、日記も。少し前まで私は一人だったから、ケイが来た日から私の毎日はもっと楽しくなった。

でも、ケイは毎朝、私を見て暗い顔をする。日中も、ふとした瞬間にケイは私から目を逸らそうとする。その度に大丈夫かどうかケイに聞くけど、ケイはいつも下手な笑顔を浮かべて、大じょう夫って答える。

ケイが来てから1週間程度経った日の夜。

先生が私達に薬を届ける。ケイは薬を飲むことができないから、先生の前ではケイが飲んだように見せるけど、飲み込みはせず、先生が部屋を出て行った後に私がこっそりとケイの分の薬を受け取って飲んでいる。

「ねえ、ユリ。」

ケイから受け取った薬を飲もうとしていると、ケイが話し掛けてきた。声は少し震えていて、不安な感情を感じ取ることができる。

「なに?」

ケイは目を泳がせて、呼吸を整えて、何かを決心したような表情で私に視線を合わせ、私の手を取った。

「ここからにげよう。」

「.....えっ。」

私の手を握るケイの手は、震えているけど強く握っている。まるで、絶対に私に目を逸らさせないと言いたいように。

「逃げるって.....。何から? ここから逃げるって何?」

私がケイに少し顔を近づけて聞いたら、ケイはまた目を逸らした。目を逸らしたと言うより、見ちゃいけないものから目を離すような。でも、ケイは下唇を噛んで、やっとの思いで私に視線を合わせた。

「おかしいと思わないの? 勉強という名目で、よく分からない機械を頭に着けられたり。運動という名目で、バケモノと戦わせられたり。毎晩、緑色の薬を飲まないといけないってことも。一気に頭が良くなるし、運動神経も人間とは思えないし、何より.....。」

ケイは何かを言いかけた。でも、瞳が揺らいだと思ったら、口をつぐんでしまった。

「とにかく、やっとなげ道を見つけたから。この研究所からにげよう。」

ケイは涙が眼から溢れるのを堪えながら訴えかけている。必死だということは分かるけれど、ケイの言葉を理解できない。

「どうしたの? ケイ、おかしいよ。ここは研究所じゃなくて学校だし、逃げるっていうのが意味が分からない。」

夜、こっそりと部屋を抜け出した時に先生の会話を聞いたと言って、話し始めた。

何も頭に入ってこない。

私たちが研究所の外から誘拐されたとか、私は1ヶ月前にここに来たとか、完璧な生物を生み出すための実験体だとか、運動に時に遊んでるのは実験する中で失敗した人たちだとか。

何を言っているのか、全くわからない。なんだか胸の奥がザワザワしている。

「研究所の大人って、先生達のこと？　なんでそんなこと言うの。分からないよ。」

ケイは己の裾を強く握っている。

「ケイ、どうしてそんな怖い顔するの？　そんな、先生みたいな……。」

「いい加減にして！」

ケイがいきなり叫んだ。

「そんなことどうでも良いから、早く私に着いてきてよ！」

そう言ってケイは立ち上がり、握っていた私の手をグイッと引っ張った。

「やめてっ！！」

私はケイが握っていた方の手を横に振り払った。

すると、目の前からケイが居なくなり、ダンッ！という大きな音が部屋に響いた。いや、違う。私がケイを振り飛ばして、ケイは壁に叩きつけられたんだ。

恐る恐る音がした方を見てみると、コンクリートの壁は丸く凹んでいる。凹んでいる所の真下にはケイが転がっていて、赤黒い液体が水たまりになり、床にどんどん広がっていく。

「け、ケイ……？」

呼びかけてもケイは動かない。この液体って、血液？

ちょっと振り払っただけ。叫んだり引っ張られたりしたのがちょっと怖くて、ちょっと混乱しただけ。本当に、ただそれだけ。

「どうしたの、ケイ……。」

おぼつかない足取りで、転がっているケイに近づいてみる。半開きになっているケイの眼から光は消え失せていて、呼吸もしていなくて、ピクリとも動かない。特に頭から血液がダラダラと流れ出ている。

気づけば、足がケイの血液で濡れていた。ふと、視線を落とす。足元に広がる血液に、ゆらゆらとおぼろげな“自分の姿”が映った。

「……は？」

そこに映っていたのは、人間とは到底思えないような姿。顔の形、目の数、口の大きさ。ぼやけていてハッキリとは認識できないが、異形の姿があった。昼間に運動で遊んでいる動物達に似たような見た目。でも、その姿はどこか見覚えがあった。昼間の運動の相手の動物。それと酷似している。私は……。

いや、違う。私は人間。でも、本当に私が人間なら、ケイは今、こんな状態になってない。そういえば、パンも上手に持てなかったし、動物と遊ぶときも触っただけで倒れたし。考えれば考えるほど、私の状況を裏付ける事実ばかりが出てくる。力を制御できていない。まるで、ケイが言っていた“化け物”。

ここに映ってるのは誰？　もしかして、ずっと前から私はこんな？　ケイが見てた私って……。

上手に息を吸えない。色んな事に気がついた瞬間、今まで知らなかった感情が頭を埋め尽くしてしまった。

私は、目の前に転がっているケイに、震えている手を伸ばす。

「ごめ……、ごめん、なさい……。」

知らないのは罪だ。

目から、緑色の涙が流れ出る。私は触手のような腕で、最愛の友達を強く抱きしめた。

その場には、私の声と、先生が近づいてくる足音だけが響いていた。